だいとう

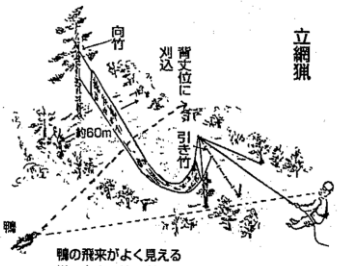
今昔物語　第3話

龍間の鴨立網猟

龍間の北の室池には、戦前毎年10月から翌春にかけて、何万羽という鴨がシベリア方面から飛来しました。鴨は非常に警戒心が強く、鉄砲を怖がるためか高く飛ばず低い山の谷筋を草木スレスレに飛ぶ習性を持っています。立網は龍間の通称「高穂」と呼ばれる場所に、朝夕の2回設営されていました。「高穂」は、室池で昼間遊んだり、昼寝したりしていた鴨が夕方、餌を求めて当時の餌場である現門真・大東市域の広大な水田地帯へ移動し、また、夜の明け方鴨が胃袋を一杯にして再び室池に集団で帰ってくる道筋にありました。

鴨猟に詳しい樋口清春さん（龍間・73歳）は、龍間で立網猟をしていた高木久男さん（71歳）から「立網猟はわずか5分間ぐらいが勝負で『来た！』その瞬時に引き竹を引っ張る時の感触が今でも忘れられない」という話を聞いたそうです。

立網猟



鴨の飛来がよく見える様、立木の枝を刈込む

樋口清春さん絵

だいとう

今昔物語　第4話

三箇菅原神社の注連縄づくり

迎春準備として三箇地区では、毎年12月初旬の1日を選び地域の氏神である菅原神社の注連縄を作るため南の押廻（栄和町）から北の大畑（三箇6丁目）までの氏子総代10数人が、北田卯之松さん宅（三箇4丁目）の納屋に集まります。そこで三箇の田んぼから手で刈り取られた稲わらを材料にして、押切りで稲わらを切る人、手でしぶを取る人、はさみで注連縄のひげを刈る人、ふさを作る人、横槌で稲わらを打つ人、手に水をつけ手の滑りを止め左縄をなう人など、おのおのが仕事を分担、協力しながら朝8時から午後3時ごろまで神社の拝殿・神木・鳥居・狛犬などを飾るために長短合わせて21本もの注連縄を作り上げます。

お正月、三箇菅原神社の初詣の日には、郷土の氏神に対する奉仕の心と熱い信仰心を持った氏子たちの手によってなわれた真新しい注連縄が境内にすがすがしく飾られていることでしょう。

氏子総代が力を合わせて長さ6メートルの注連縄をなう